



朝霧遊水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

髪

【Zコード】

N6928A

【作者名】

朝霧遊水

【あらすじ】

彼は友達だ。恋の相談も受ける。僕の気持ちも知らないで。君は僕が女の子だつて知つているはずなのに。

「お前ら仲良いよなあ」

「こひいづのは腐れ縁つて言つんだよ」

「にしてもこの年でそこまでつるまないだろ?付き合つてんじゃねえの?」

「はあ?」

「あのな、俺の好きなタイプは笑顔の可愛らしい、長い髪の守りたいやうなお嬢さんだ!」

「……だ、そうだよ?僕のどこが当てはまるつて言つんだよ?」

「……お似合いだと思うんだけどなあ」

今日も空は青い。

木製のベンチに座つて、空を見上げる。絵の具で塗つたような空はどこまでも青く澄んで、一つ二つ浮く雲はやわらかく。本日も快晴。僕は視線を下に戻す。この暑い中だというのに、結構多くの人がいた。家族連れや、犬の散歩をしている人や、僕みたいに一人で居る人も。楽しそうに腕を組みながら歩く男女が目に付いた。ううん、微妙に羨ましいぞ。ただ少し暑苦しいが。

「よう、待たせたな。……ん?何見てんだ?カップル?」

と、突然後ろから声がかかって頭の辺りに重みを感じる。僕が振り返ると案の定、にやりと笑ったスポーツ刈りの男が居た。シャツを

捲し上げていて、浅黒い肌が健康的な笑顔とよく合っている。

「遅れておいて謝罪の言葉もないのかよ、悟史」

「俺らの間にはそんなものなくても揺るがない友情というものがあるはずだ！」

友情、ねえ……。

「そんなもの感じてるの悟史だけじゃない？」

「うわ、酷でつ！俺らの友情メモリーズはかれこれ……何年だ？」

覚えておけよ、それくらい。

「小学校4年からだから8年弱だろ。悟史は相変わらずお頭が弱いねえ」

「そういう真琴まことは相変わらず毒舌だよな……」

「別に普通だよ」

僕は視線を逸らす。

「それより何か用があるんじゃないのか？」このクソ暑ひんに中呼び出しておいでさ」

「ん、ああ……ちょっと、相談が……な」

何事にもまっすぐ一直線、単純明快、猪突猛進、軽挙妄動な悟史が珍しく口くちもある。

「どこか行く？こんな所にいつまでも居たら、僕の美しい白い肌が紫外線に侵攻されて悟史みたいになってしまつし」

「暑いならそう言えよ……。つたく、可愛くないなあ」

しうがないよ、それは。

「僕に可愛らしさを求めるのが間違いなんじゃない?」

「それもそうか? 髪伸ばし始めて見た目は女の子みたいになつたのによ……」

基本的に悟史の方が無意識に失礼だけだ。

「僕は元から女の子だよ」

そんなことに気付いてない馬鹿も居るけどね。本当に馬鹿だよ。

「まあ、真琴が独身のままおばあちゃんになろうと、俺たちの友情は永遠だ!」

「ふうん、勝手に僕の将来設計しないでよ? 悟史こそ自分の心配しなよ」

僕が捻くれているのも大概悪いんだろうけどね。

冗談で言つたつもりが、悟史は一瞬暗い顔になる。本当に感情が顔に現れる奴だね。……何の相談か察してしまつたじゃないか。

「……恋バナかよ。座ろう、そこの喫茶店にでも入つてせ」

僕がそこにあつた喫茶店を指差すと、悟史は力なく頷いた。

扉を開けるとカラーンと鈴が軽い音と立てる。珈琲の香りがふわりと鼻腔をくすぐる。店内は落ち着いたアンティーク調だった。使い古

された、しかし入念に手入れされているのだろうチョコレート色の机と椅子。間接照明は淡くそれらを映して、外との光の量に一瞬眩量がする。落ち着いた洋楽がゆっくりと店内に流れている。

「いらっしゃいませ」

しわがれた声に気付いて顔を上げると、人のよそそつなおじいさん
が僕たちを見てにっこり笑っている。この店の店主だらう。

「お好きなところにお座りください」

僕たちは日差しから逃れるように、奥の方の席に陣取る。冷たい水
が出された。

「注文は?
「Hスプレッシン」

メニューも何も見ずに答える。恐るべあるだらう。

「……俺も」

沈んだ声で悟史も言つ。

「承りました」

にこつと笑つて老人は去っていく。

沈黙が降つた。それに耐え切れなくなつて、僕は水で喉を潤す。氷
の涼しい音がやたらと響いた。

「……相手は？俺が知ってる人？」

「多分、知らない。バイト先で出会った。一度くらいは会ってるかもしれないけど」

ファーストフード店の人か。前に悟史を冷やかしに友達と一緒に行つた時に居たのかもしれないけど、僕は覚えていない。

「どんな人？」

「明るくて、一緒に居て楽しくて、でも危なっかしい守つてあげたいような人。……かな」

店内に入つてはじめて悟史は微笑んだ。僕が知らない、幸せそうな儚い笑顔。

「……そつ、か」

再び沈黙。緩やかに、壮大に歌つた遠い国のラヴソングが痛い。

「お待たせしました」

老人が静かに二つ、コーヒー カップを置く。くゆる白い湯気が柔らかな曲線を描いては消えていく。

僕はスプーンで砂糖とミルクを混ぜていった。それを見て悟史は少し笑つた。

「真琴は大人っぽいくせにコーヒーはストレート駄目だつたんだよなあ」

「誰にだつて一つや二つ弱点がないと、悟史みたいに弱点だらけの人間がかわいそうだからね」

本当は強い振りしているだけなのにね。僕はきっと、コーヒーも飲めないくらい子供なのに。

「へーへー、そうですね。じゃあ、そんな真琴さん?……彼女の誕生日に告白しようと思つてるんだ。プレゼントは……何が良いか教えてくれませんか?」

無神経なやつめ。

「そんなことを僕に聞くのかよ?」

「女にプレゼントなんてしたことねえからなあ。お前以外には相談したら笑われそしだし。なつ、親友のよしみとして頼む!」

手を合わせて悟史はお願いのポーズをする。僕がそう言わると弱いこと知つてるくせに。

「はあ、分かったよ

何で、好きな相手と誰かをくつつける手伝いなんてしなきゃいけないんだろうね?ああ、僕つて臆病だ。

「恩にきるーお前も何かあつたら俺に頼れよつーー!」

僕が好きなのはお前なのに。

「そのこと、ここで告白してしまえよ、僕。戸惑わせて、困惑させて、迷惑かけろよ。だって、僕。今お前確実に女として見られてないぞ?」

そう思つても、口の中はカラカラ。

「悟史に頼つたら逆に悪化しそうだけど?」

「思つてもない」とぱつかりが口から出す。

「何をう？俺がいれば百人力だ！」

「うわ、悟史が百人居たら公害だぞ？保健所に駆除されるぞ？」

「俺を何だと思ってるんだ？」

「悟史」

軽口だけなら会話はいくらでも弾んでいく。

「俺は何だー！？」

「だから悟史。それにしても随分と哲学的な問い合わせだね」

「真琴！俺で遊んで楽しinでるだろー？」

「うん」

「ひつひつ笑う。ほら、まだ大丈夫だ。ちゃんと笑えてる。きっと、僕は笑って祝福できる。

「即答するんじゃねえつ！」

「良いだろ？悟史の幸せせちよつと位奪つても。……幸せなんだろ？」

「じゃなかつたら、ぶつ飛ばしてやる。

悟史は虚を突かれたような顔になつて、また、あの幸せそうな笑顔を浮かべた。僕には浮かべさせることができない笑顔。

「ああ。真琴のおかげもかなりあるがな！」

「なら少しは還元しろよ」

告白もしないまま、失恋決定だし。ちょっと位、意地悪しても罰は当たらないでしょ？

「真琴には敵わねえな……」

僕こそ本当は君に敵わないよ。絶対言わないけど。

「当たり前だろ？天下の真琴様だよ？それより買い物早く行こうよ、見繕つてあげるから」

「ああっ！」

悟史はずっと手をつけてなかつた、冷めかけのコーヒーをぐいと飲み干す。

「ありがとうございました」

カラソと音を立てて扉がまた開く。僕たちは夏の日差しの中へ身を投げ出した。

「いらっしゃいませ……おや？」

嬉しそうな顔の悟史と別れた後、僕は再び喫茶店を訪れた。

「（注文は？）

「Hスプレッソン

さつきと同じ席に座り、さつきと同じように筆をとる。老人はまた柔らかい笑みを浮かべた。

「お待たせいたしました。……髪の毛、切られたんですか？」

「うん。失恋したしね。今更こういつの古いかな？」

元々、どつかの誰かが髪の長い女の子が好きだとか叫んでたらから、伸ばしてただけだけど。

「いいえ、よくお似合いですよ」

「そりかね？ありがとう。……髪の毛が短くても良い女になつて、いつか後悔させてやるんだよ」

僕は「コーヒーを手をかける。薫り高いそれに、自分の顔が映つた。髪の短いさっぱりした顔の女が、こっちを覗きこんでいる。

「あなたなられますよ

「うん、努力するんだ。後悔はしたくないしね」

僕はコーヒーを口に含む。苦味と少しの甘みが口の中に広がった。

「苦いなあ……」

そう呟いて、一人苦笑しながらコーヒーを飲み続けていた。

(後書き)

初めての恋愛小説で…。色々至らぬ所もありますが、感想頂けると
ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6928a/>

髪

2010年11月16日08時37分発行